

米子城跡

米子城の双子の天守閣は、湊山の山頂から270年間、周囲を支配していました。米子城は15世紀後半から段階的に築城され、1602年には中村氏の本拠地として最終的な姿に近づきました。西には中海に突き出た小さな岬があり、東には大山の麓まで続く肥沃な平野が見渡せるという珍しい場所にありました。南には新加茂川が自然の障壁となっており、幅広い人工の堀が城全体を外部から遮断していました。この立地は、陸上・水上の両方からの攻撃を防ぐために選ばれましたが、実際に敵と対峙することはありませんでした。

天守閣が2つある異例の設計

日本のほとんどの城と同じく、米子城には何重もの郭（くるわ）という壁付きの区画が作られ、高い郭ほど安全でした。本丸は、海拔90メートルの湊山の複雑に入り組んだ石段の頂上に建てられました。5階建ての天守閣が、最も高い階層である巨大な斜めの石垣の上に建てられ、それより小さな4階建ての天守閣がその近くの同様の石垣の上に建てられました。このように天守閣が2つある設計はかなり珍しく、米子城のシルエットは独特なものになりました。今日、木造の城の建物は何も残っていませんが、最上階層の石垣からは、石壁、斜面、そして階段の様子が伺い知れます。最上階層の石垣から眺めると、活気ある都市、そしてそこに流れる川や橋、遠くには大山、中海、そして北方向には日本海を一望できます。上の石垣までは、絵画に出てきそうな曲がりくねった道や階段を15分登る必要があります。

防衛のための独立郭

米子城は、その他の点でも自然の地形を巧みに生かした設計となっています。深い谷を挟んだ湊山の反対側には、湊山より低い飯山という丘があるのですが、こちらにも独立した郭と防衛施設が設けられており、米子城の主要部分に対する攻撃に備えるための見張り台として使われていました。湊山山頂の他の山頂や高台にも同様の城郭があり、本丸との間は歩道で結ばれていました。その中でも最も大きなものは内膳丸です。要職にあった軍師の名を冠したこの郭は山の中腹にある長い尾根の上にあり、湖や城の下層部、市街地を見渡すことができました。御船手郭（港湾郭）には、水軍の分遣隊が配置され、埠頭、船屋、船乗りの住居、関連の施設が作られました。これは日本の城としては珍しいことでした。

城主の屋敷

米子城の壁に囲まれた階層の中で、最も下層にあったのは、二の丸と三の丸です。三の丸は、内堀に沿った広い範囲に作られ、宿舎、馬小屋、米庫、乗馬場、そして建築

およびその他の必要な作事の拠点となっていました。二の丸は、それより高い2階層わたって高い石の壁で囲んで作られ、枡形小口（ますがたこぐち）という難攻不落の門付きの廓で守られていました。二の丸には城主の屋敷が作られ、それに接続された建物は居住空間や来客を迎える空間などとして使われ、さらに中庭や庭も作られました。米子城の周囲の防衛のために、内堀と外堀の間には壁で囲まれた武家屋敷の区画が設けられました。

国の史跡

米子城はいくつかの大名の間で引き継がれてきました。1632年から1869年まで荒尾氏が用いていましたが、1869年に明治政府によって封建制度が廃止され、米子城を含むほとんどの城の破壊の命令を受けました。米子城址はほとんどが自然の還っており、最終的には運動施設を備えた公園となりました。隣接する武家屋敷の区画は米子の主要な商業・行政の中心地となりました。2006年には国の史跡に指定され、現在も復元工事が行われています。